オリ・パラ監察員として ～2メートル上から見たFOP～

東京陸上競技協会
中村信也 NAKAMURA Shinya

1 Introduction はじめに

私は、第32回オリンピック競技大会（東京2020）[以下、オリ] および第18回パラリンピック競技大会［以下、パラ］において、監察員の副主任として任務にあたった。これまでの日本の競技会のトラック競技運営と異なる点など多くの経験を、監察員の仕事をメインに述べたいと思う。

なお、タイトルにある『２メートル上』とは、主任の補佐という立場からＦＯＰの状況を見渡せる位置として、スタンドとＦＯＰ間の渡り階段の上に座っていたからだ。裏の理由は、2021年５月のテストイベントの時に、世界陸上競技連盟［以下、ＷＡ］のTechnical Delegateが監察本部を見て、「テーブルと椅子を出して何をやっているんだ」と言われ、オリ・パラ本番では監察本部の小スペース化のため、私への椅子支給がなかったために階段に座らざるを得なかったというのが真実である。

図１　私のオリ・パラでの定位置

階段のすべり止めシートで擦れてボロボロになったズボン

2 Preparation for TOKYO 2020 オリ・パラ本番までの準備にて

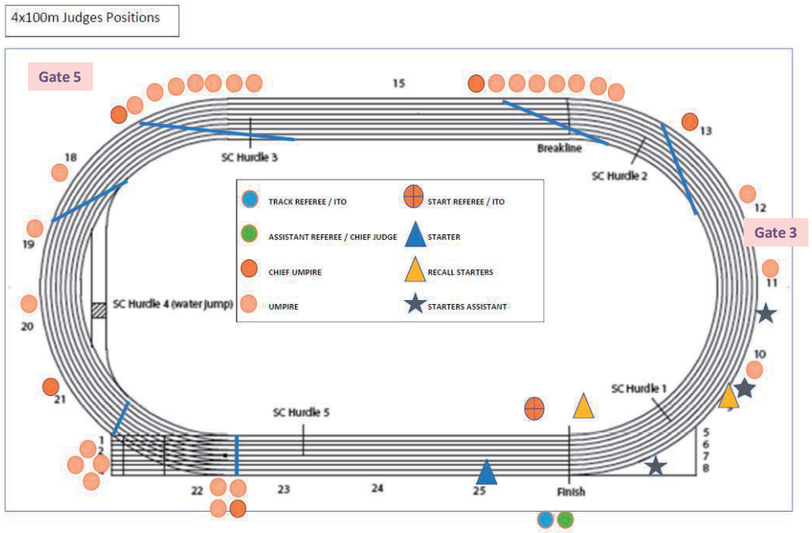
公認審判員資格を取得したのは、大学在学中の新潟であった。新潟では、審判員としてのノウハウを一からを学んだ。その時は、オリ・パラで競技役員をやるということは想像もしなかった。その後、就職で東京に戻り、審判員を続けていた2013年９月。中学生対象の競技会の競技者受付係で、大会本部からの依頼でオリ・パラ招致活動で大量に余った団扇を配布していた中で、東京開催が決定した。その後、2017年４月にＪＴＯとなり、今回の任務担当となった。

2018年から2019年にかけてオリ・パラに向けた実技研修があった。2017年から仕事で海外案件の担当となり、毎月のように海外出張をしている中での研修参加であったため、連続３日間を超える研修には参加できなかった。特に、国際競技会を経験できた2019年世界リレー横浜大会に参加できなかったのは今でも悔しい限りである。

そんな中で2020年には、コロナ禍によってオリ・パラの開催自体が2021年に延期となった。任務委嘱を受けてから本番までの期間中、主任とは立場が異なる副主任として自分は何をやればいいのだろうということを日々、自問自答を繰り返した。2021年５月のテストイベントは、トラック競技の監察活動状況をメモするのみで、あっという間に時間だけが過ぎてしまった。

2021年６月にＷＡのオンライン講習があり、その中にＷＡが作成したトラック競技関係審判員の配置図があった。その監察員の配置内容は、曲走路の日本の標準的な配置人数よりもかなり多くなっていた。配置図のうち4×100mリレーのものを図２

図２　WAから提示された4×100mRのNTO配置案



に示す。その後、近々の世界選手権およびオリンピックの状況をＷＡの公式動画サイトで確認。提示された配置図とほぼ同様の監察員の配置状況であったため、オリ・パラの監査員人数では不足する事態と察した。そのため、私で考えた監察員配置案を作成し、監察員主任にメールで提出の上、オリ本番までに判断をお願いした。

3 本番での任務について

私の仕事内容

オリ・パラでの監察員副主任としての任務は以下の内容を実施した。

①主任およびトラック担当総務員そしてトラック審判長の補佐

・監察本部にいてＩＰ無線機にて全体進行状況を確認。必要時、主任の代行で通話連絡

・規則違反等の状況発生時、必要に応じてトラック担当総務員および主任がトラック審判長への報告をフォロー

・主任から依頼があった時にその指示に従って行動

②審判員配置表および配置図の作成

・主任による監察員メンバーの配置割り振りを円滑とするために、配置表および配置図を作成し、主任およびトラック担当総務員に事前にメール配信

③監察員連絡票に各レースにおいて準備完了および規則違反の有無を記録

・監察員連絡票（自作）を確認し、監察本部にて各レースの準備完了→スタート時刻記録→規則違反の有無を記録。

④コールルームスケジュールおよびスタートリストをＴＩＣにて受け取り、メンバーへ情報配信

・監察員全員にＳＮＳのグループメッセージにて情報配信。原紙はトラック担当総務員と主任に配布

図３　トラック審判長との意見交換会の様子

・頻繁にＴＩＣへ通うことで、最新情報を提供できるように配慮

⑤監察員メンバーからの問合せへのアドバイス

・監察員メンバーより、ＦＯＰでの活動中の疑問点などに対して、アドバイス

本番の中で

常に監察本部にいることでＩＴＯの方々と直接コンタクトする機会があり、動きを知ることができた。ＩＴＯは必要時、ビデオルームへ状況確認する対応もしていた。また、ＩＴＯリーダーおよびTechnical Delegateの指揮の下で動き、フィールド・トラックの分担関係なしにチームとして、リレーでは２～４走の走者のバトンゾーン入れ、長距離種目で周回記録確認をアシストしていた。

オリ・パラの双方につきＩＴＯから、各種目の監察員配置や活動に関してクレームを受けることはなかった。オリでは、ＩＴＯトラック担当と監察員メンバーとの意見交換会を監察員メンバー有志が企画し、トラック競技最終日に実施。少ない時間であったが有意義な時間だった。図３にはその様子を示す。

競技運営はＮＴＯ全員に配布されたＮＴＯsマニュアルに沿って行われた。その中で、トラック競技の監察員の任務で特筆される内容を下記に述べる。

■リレーの対応

日本の競技会では通常、出発係で実施しているバトンパスゾーンへの競技者の誘導、マーカーの配付。4×400mリレーの第３走および第４走へ並び順につき、第３コーナーの通過順の連絡は監査員で実施。

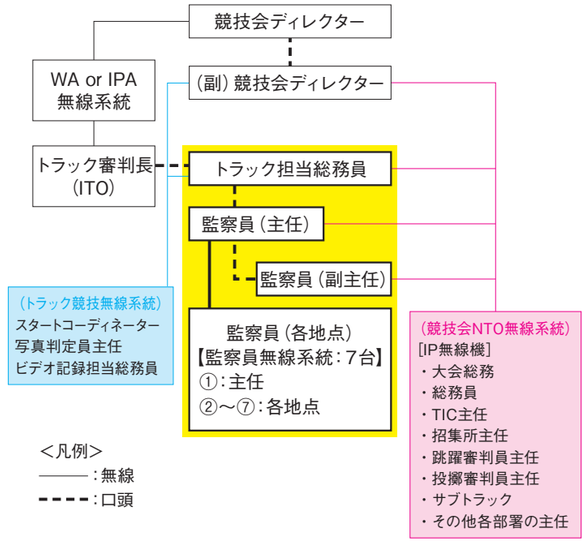
■ハードルの整理

日本の競技会では通常、100ｍＨ、110ｍＨ、400ｍＨのハードルの設置後の管理は用器具係が務め、各ハードルの近傍に待機するが、本大会では監察員が実施。ハードルに破損があった場合は、監察員から用器具係に連絡し、必要に応じて予備のハードルを用器具係が運んで交換する流れだった。100ｍＨおよび110ｍＨのレース間の整理は、速やかな整理が要求されたため、レース監察に配置されていない監察員メンバーをスタート側とフィニッシュ側に整理担当で配置し、レース監察メンバーのハードル整理を補助した。

■トラック競技連絡の体制について

図４にオリ・パラでの連絡体制を示す。監察本部の３人は『競技会ＮＴＯ無線系統』により競技会全体運営状況を把握。トラック競技のみの連絡手段として『トラック競技無線系統』。各地点に配置された監察員と主任間の連絡手段として『監察員無線系統』がそれぞれ構成された。

図４　オリ・パラの連絡体制（トラック競技）



■本大会での監察員の配置

監察員配置の実績を図５にオリ・パラ共通種目、図６にオリのみの種目を示す。この配置はオリ・パラ期間中に監察員メンバーで試行錯誤と協議をしながらまとめた結果である。

ストッパーの配置はなしで、ＷＡからの指示もあり、各種目とも必要最低限の配置となった。なお、パラでは曲走路の監察を増やし、T11、12の種目では、フィニッシュ地点にテザー確認担当を設けた。

図５　オリ・パラ共通種目の監察員配置

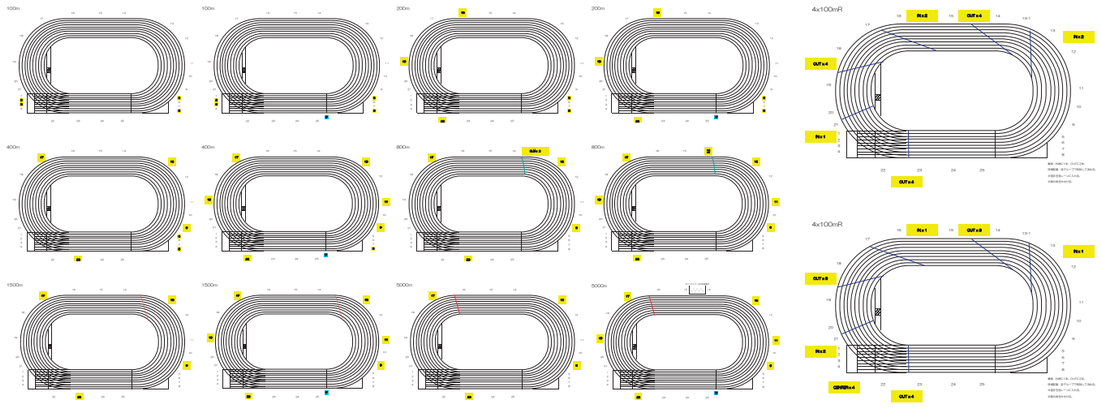
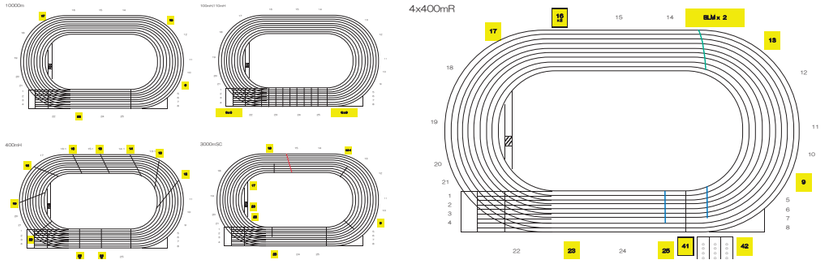


図６　オリのみ種目の監察員配置



4 Equipment in track events
オリ・パラのトラック競技における用器具

■監察員の道具（図７）

黄旗及びブレイクラインマーカー（緑色）は、オリ・パラの用器具公式サプライヤーのMONDOより提供され、監察マーカーと椅子は国立競技場備付のものを使用した。

■3000ｍＳＣの障害物と水濠（図８）

MONDO製が使用された。なお、オリ後、MONDOに返却となったために、現在は日本にない。

■ハードル（図９）

MONDO製のものが使用された。溶接の出来が悪く、ハードル設置に苦戦。結局、バー上部で直線に並べる対応とした。バーは木製であり、スパイクなどが引っかかると塗装やバー自体が簡単に剥げてしまった。交換用のバーも不足し、バーの剥げ具合が小さいものは、白テープで養生された。3000ｍＳＣの障害物同様にハードルもオリンピック後、MONDOに返却となり、現在は日本にない。

■スタート台（図10）

MONDO製のものが使用された。本体下部にキャスターはあったが、機敏な移動が考慮されていない重い構造であったのとキャスターでタータンが痛むので、スタートチームの方々は、搬送台車に載せて移動せざるを得なかった。

■ブレイクラインマーカー（図11）

MONDO製の緑色のものが使用された。ブレイクラインへのマーカー設置位置は、監察員待機所のホワイトボードに図示することで、メンバー間で情報共有を図った。

■4×400ｍリレーの第２・３・４走者の待機所（図12）

2021年５月のテストイベントで、スタート直前にＦＯＰにてＷＡから第２・３・４走者毎に並べるための仕切りを用意するよう指示があった。無論、テストイベント時は用意できなかったので、オリではあらかじめ必要なものを用意しておき、リレー開始前に設置した。

■4×100ｍリレーのマーカー（図13）

各コーナーに白養生テープが配布され、それぞれのコーナー担当で50㎜×400㎜に切って、競技者に配布した。400㎜の長さを確認するために写真のような治具（400㎜に切ったものを折って定規状にしたもの）を作成して、配付を速やかにした。なお、黒のビニール袋は、レース後に取り外したマーカーおよび競技者が持参したペットボトル回収に使用した。

■パラリンピックでのブレイクライン手前のマーカー（図14）

車いす800ｍでは、黄色のテープマーカーを使用。用器具係がブレイクライン手前に貼付をした。

■ビデオルーム（図15）

オリ・パラのすべての競技はビデオルームで常に記録されていた。ビデオルームは制御室と閲覧室に分かれており、制御室では、トラック・フィールドの競技状況が常に映し出されていた。映像は国際放送で使用されているもので、状況確認が必要な時は、速やかに再生、さらにはズームアップなどが制御可能となっていた。閲覧室は、この制御室とは少し離れたところにあり、抗議関係者のみが入室し、映像確認できるのみのスペースであった。

なお、このビデオルームはＴＩＣの直上に配置され、ＴＩＣに来た抗議関係者は、ビデオ確認が必要な場合、すぐにビデオルームに案内された。

図７　監察員の道具

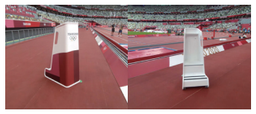
図８　3000mSCの障害物と水濠

障害物（高さ調整箇所）　障害物（搬送用台車）　水濠部（高さ調整箇所）　水濠部（全景）

図９　ハードル

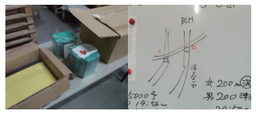
全景　バー補修箇所　高さ表示　位置合わせ

図10　スタート台



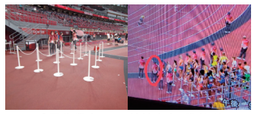
スタート台（前）　スタート台（後）

図11　ブレイクラインマーカー



ブレイクラインマーカー現物　置き方の情報共有

図12　4×400mRの待機所



設置作業中　競技中（国際放送から。赤丸は私）

図13　4×100mRのマーカー等（各コーナーへ配付）

図14 パラリンピックでのブレイクライン手前のマーカー

図15　ビデオルーム

制御室全景　操作用モニタ

閲覧室全景　閲覧室入口

5 まとめ

監察員の配置場所は主任からポイントのみが指示され、実際に監察する詳細位置は各々がそのポイントにあった位置を決めて行った。また、リレーバトンパスの監察ポイントも主任からコーナー割り当てが指示されたのみであり、各々のコーナーに割り当てられたメンバーが協議の上、詳細位置や役割を決めて活動した。オリ・パラの監察員に選抜されたＮＴＯメンバーの多くは、監察員をメインとした審判活動をしていない人である。この監察員の活動が、今後、それぞれが専門とする審判活動に有益になると思っている。

公認審判員資格を取得してから、さまざまな部署を経験してきた。かなり前の話になるが、仕事の出張先で、監察員として委嘱を受けていたとある競技会の前日に突然、ビデオ監察を実施するので翌日から補助員を使ってビデオ撮影してほしいと連絡を受けた時は、出張帰りの新幹線の中で、撮影配置表やポイント説明などを手書きで作成した記憶がある。オリ・パラでは、このような臨機応変に対応する場面が多々あったことも、詳細は割愛するが追記とする。

今後の陸上競技の運営の発展のため、若い公認審判員の方々には、以下を提言したい。

①普段やっている審判部署以外の委嘱を受けた時、または急に委嘱内容が変更になった時は、スキルアップと捉え、柔軟に対応する。そのためにも普段の研鑽に努める。

②大規模な競技会やランクの高い競技会に審判委嘱を受けた時は、他の部署の仕事の様子を確認する。具体的には、サブトラック、用器具倉庫、アナウンサールーム、写真判定室、ビデオルーム、招集所、ＴＩＣなどの設営状況を確認する。

③陸上競技場での競技会では、スタンド上部で競技会を眺める。

これは、公認審判員を取得してから数年後の審判講習会で、日本陸連からの派遣講師が発された内容で、当時、かなり衝撃的な内容だった。スタンド上部では、競技者、観客、競技役員のすべての動きを見ることができ、それによって競技会全体の運営を理解することができる。今でも時間がある時はスタンド上部で競技会を見て、いろいろな気づきを感じている。

最後に、いろいろなスポーツ自体が日々進化している中で、そのスポーツ競技の運営からも学ぶことが多く、それを陸上競技に生かすことが、今後の私の役割の一つではないかと勝手に思っている。人生で経験することがあるかないかの今回のオリ・パラの経験は、絶対に今後の人生の中でいろいろと役に立つ。そして、今回実現できるはずだった密かな私の思いが、いつかは実現できることを願いつつ、これからも陸上競技の公認審判員として活動を続けていきたい。